

二週間から「祈り」をテーマにしている。密室の祈り、主の祈り、と続き、今回は熱心に祈るハンナの姿に注目する。

※サムエル記とその時代

サムエル記の時代は、士師、「さばきつかさ」の時代の終わりである。めいめいが自分勝手に自分の正しいと思うことを行っていた、イスラエルの歴史の中でもっとも暗い時代である。しかし、主は憐れんで、最後の士師、サムエルを誕生させた。今日、注目するのは、そのサムエルの母であるハンナの祈りだ。

※ハンナの悩み

ハンナが祈らざるを得ない「悩み」は何だろうか。エルカナには二人の妻がいた。それぞれの名前はハンナとペニンナ。二人の妻がいた、と聞いただけで、悩みが大きいことがわかる。①夫から愛されているのに子どもが与えられない苦しみ。②夫に「申し訳ない」という負い目。③第二夫人のペニンナは子どもを産んで育てているといううらやましさ。④ペニンナに馬鹿にされるつらさ、嫉み。⑤子どもがないことが、神様からの祝福が奪われたように感じる悲しみ。ハンナの心は痛んでいた。

※真剣に主に向き合うハンナ

しかし、ハンナは立ち上がる。ハンナの決断の時だ。たとえ家族の前であっても、泣いたり、苛立ったり、ふさぎ込んだりすることを止める決断をした。他人から憐れんでもらうことを期待するのではなく、主の御前に出て、主なる神様からの憐れみを求めた。ハンナは主の御前に出て激しく泣いた。

(10 節)そして、ハンナは誓願を立てる。ハンナは、主の御前に出て、祈り求めていくうちに、子どもが欲しいという自分の求めが利己的であることに気付かされたのであろう。子どもが与えられることの意味が変えられた。自分が産んだ子どもであっても、子どもは主なる神様が与えて下さる賜物であり、子どもは主のものなのだ、ということを知っただろう。実際、乳離れた我が子を、すぐに、祭司エリの所に連れて行って、主に委ねた。人前でも泣いては口を尖らしていたハンナが、大きく変化したのは、主の御前で自分の心を注ぎだしていたからではないだろうか。15 節「私は主の前に心を注ぎだしていたのです。」これは今日のテーマ聖句である。「心を注ぎだす」とは、自分のすべてを、自分自身を、主の御前に注ぐのである。主の御前で心の中を洗いざらい訴えたからこそ、主の御心が強烈にハンナに注ぎ込まれたのだ。

※心を注ぎだす祈りを模範にして

さて、私たちは、ハンナの祈りから学びたい。自分の心の中にある思い、気持ち、感情を主の御前で訴えよう。私たち(私)の心の中に何があるのか。苦しみ、悲しみ、不安や恐れ、思い煩い、悩み、後悔、嫉みや恨み、イライラ、喪失感、など、たとえば、親しい人がいたとしても本当の意味では誰にも分かってもらえない、という思い。「私の心には悩みがあります」と、ハンナのように、まずは悩みがあるという事実を認めて、主の御前に正直に言い表そうではないか。きれいな整った祈りでなくてもよい。激しくみっともない祈りでもよい。そして、主の御声が聞こえるまで、静まって待ち望もうではないか。主は聖書のことばを通して語り、個人的に御声をかけて下さり、道を示して下さい。全く主に信頼することができる、主に委ねることができる、とするなら、まさに、主の御業、主の働きである。

「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」第一ヨハネ 5: